

不運と幸運

第10期 小笠原 裕公

そもそも小野ゼミに入ろうと思った理由は、至極単純なものだった。「1番はじめに説明会に行ったゼミ」だからである。そのあとに様々な理由（厳しいゼミで自分を鍛えたいとか、就活のネタ作りをしたいとか）をつけたものの、根本にあるのはそんなくだらない理由であった。

小野ゼミに入って最初の活動が春休み中にはじまると聞いたときは、度胆を抜かれ、その後のケース発表やディベートなどで、「しまった」と思った。予想以上の厳しさだったからだ。その時は自分の不運を嘆いた。なぜ短絡的に厳しいゼミを選んでしまったのか、もっと楽なゼミに入っておけばよかったのにと。四六時中グループ学習室にこもり、授業にも出ずに作業に打ち込む様になかなかドン引きした思い出すらある。その中でも、いまいち自分に力がついているのかわからなかった。論文執筆がはじまり、どうせなら代表職でもやるかとインゼミ論文代表になったものの、自分の努力は空回りして、周りのメンバーに助けられる日々が続いた。ここまで来て、自分のふがいなさにまたまた嘆くことになる。周りに迷惑ばかりかけて、代表らしいことはなにもできず、成長も実感できない。自分のチームに入ってしまったメンバーの不運を察するばかりの日々であった。しかし、優秀なメンバーが固まってくれたおかげか、論文の進む具合は悪くなく、順調であった。

そんな中で、三田論中間発表と題して他ゼミとの発表会を迎える機会を得た。その発表会を通じて自分たちのレベルの高さというものをはじめて実感することができた。そして、12月の四分野インゼミ報告会でも自分たちの発表の質の高さというものを感ずることができた。自分が今までやってきたことは無駄ではなく、しっかりと力になっているんだと分かった時、視野が広がった気がした。自分の力不足に腐っていた頃には気付かなかったメンバーのフォローや、小野先生の熱い指導、先輩方の親身なアドバイスがあったからこそここまで成長できたという事実気付くことができた。

ここにきて、自分はこのゼミに入れて、幸運だったと感じた。入った当初は運がなかったと嘆いていたけれども、諦めずに小野ゼミで勉強してきて本当によかったと思っている。そういう風に思える環境に出会えたことは本当に幸運で、自分の人生の中でも大きなターニングポイントになったのではないかと感じている。

諦めずに一緒に活動してきた10期、親身になってアドバイスしてくださった9期の先輩方や大学院生の方々、そしてなによりも小野晃典先生に出会えた幸運に感謝してエッセイを締めくくりたいと思う。本当にありがとうございました。